
おかしな奴ら

きい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おかしな奴ら

【Nコード】

N8797K

【作者名】

きい

【あらすじ】

まさか、正体がばれたのか！？
オレが出会ったのは、同じ高校生でありながら、癖のある奴らだった。

コナン×スクランのコラボ。

サスペンス要素一切なしのどたばたストーリー！。

きっかけ

「犯人はあなたです」

えっ?!

八雲さん？

今までおとなしかった八雲が、そんな発言をしたのだからかなり驚いた。

「ばかを言うな。何を証拠に」

「証拠が分かりませんが、凶器は」

「なっ」

「認めてくれますね」

「くそっ」

すごい。

事件が発生してから、わずかに5分。

オレはまだ調査も行っってなかったのに。

「すげ。八雲姉ちゃん」

「コナン君より、先に事件を解決しちゃった」

「ほんとすごいです」

元太たちも驚いている。

ちなみに上から元太、歩美、光彦の順だ。

「どうやら、おかぶとられちゃったわね」

「まあな。でも、解決したんだからいいだろ」

なんだか、調子が狂う。

こんなにも、早く事件を解決したのは始めだ。

「あの、なんかごめんね」

「ううん、謝ることないよ。八雲姉ちゃん
なんだ？」

まるで、がっかりしているのが、伝わったかのような言い方だ。

「そう、ならいいけど、工……いえ江戸川君」

えっ？

いまなんて？

困惑

「八雲姉ちゃん。いまなんて」

（まさか、正体がばれたのか？ でも、なんで？）

「あっ、え、えっと」

どうしよう。

こんなつもりじゃなかったのに。

落ち込んでたみたいなので、励まそうと思ったただけなのに。

まさか”あなたたちの心を視ました。”などとは言えない。

正直に言った所で、こんな”非科学的”なことを信じてもらえるかも分からない。

でも、言った方がいい気がする。

工藤君？

が混乱のあまり、よく分からないことを考え始めている。

「えっと、江戸川君だっけ。ちょっといい？」

「ああ、うん」

（一体どこでばれたんだ？ オレなにか変なこと言ったか？）

とりあえず、最初から話してみよう。

まずは私の力について。

* 2時間前*

宿に入る前から感じてた。

なにか妙なものを。

なに………これ？

どす黒いオーラ？

今まで、見たことのない黒い幕のようなものが、宿から溢れ出ていた。

「どうしたの？ そんな所で固まって」

「ううん。中に入ろうか。姉さん」

なにも気づかなかったふりをして宿の中に入った。ところが、中に入ってみると、もっとひどかった。

これはいつたいなに？

すべてが黒い。

薄っぺらい黒い幕が宿を包み込んでいた。

出会い（前書き）

八雲の能力を
スクリプト
原作よりスキルUPしてます。

出会い

八雲Side

これ。もしかして、誰かの思考なのかな？
私の能力は“人の心が視える”こと。

だけど、文字ではなく、色で視えたのはこれが初めてだ。
なんだか、怖い。

色で視えたからではない。
なんだか、世界が暗くて、冷たいのだ。

「八雲。大丈夫？　なんか顔色が青いよ」（なにかあったのかな？）

「ううん。ちょっと疲れただけ」

「そう、ならいいけれど」（心配だなー）

せっかく、姉が旅行に連れてきてくれたのに、これではだめだ。

『うひょー。絶景』（これで、ビールでもあれば）

渡り廊下に差し掛かると家族連れだろうか。

男性が廊下から見える景色を見て叫んでいた。

「ちょっと、お父さん？　叫ばないでよ」（恥ずかしいなあ）

「そっだよおじさん」（またかよ）

なんだらう？

あの子？

やけに……………。

いけない。

能力をOFFにしなくては。

Side Out

コナン Side

『あー。コナン君』

「げっ、お前らどうして？ ここに」

「なについて、博士に連れてきてもらったんだぜ」

「うっ、まじかよ」

そこには阿笠博士や灰原だけでなく、少年探偵団までいた。

せっかく、うまい言い訳して、蘭たちと付いてきたというのに台無しである。

Side Out

即解決

八雲 Side

『きゃあああああ』

えっ?!

悲鳴?

今のはどこから?

「今のなんだったんだろう? 八雲、動いちゃダメよ」

「大丈夫。危ないことはしないから」

姉さんがおびえてる。

なんとかして、あげなくちゃ。

まず、悲鳴がどこからしたのか調べないと。

(なんだ?) (なに?) (怖い) (悲鳴?) (なにがあつた)

能力をONにして、あたりを見回してみると、ありとあらえる方向から、心という名の文字が視える。

この中から、悲鳴について考えてる人は。

(なっ、これは一体)

!

視つけた。

「姉さん。ここにいて」

「あつちよつと、八雲!」 (危ないよ)

「大丈夫。すぐ戻るから」

姉が落ち着かせながらも、お風呂場に向かった。

これは……………。

お風呂場なの？

お風呂場を開けてみると、墨汁をこぼしたような黒い世界が広がっていた。

開ける前から、なんだか妙な空気を感じてはいたが。

「うわっ、なんだ」（また事件か？）

あれ？

この人どっかで……………？

でも、事件って一体。

！

誰かが倒れてる！

黒い世界に気をとられていて、倒れている人物に気付くのが遅れた。

「おい、なんなんだよ。あれ」（まあ、バレないよな）

！

まさか、この人が犯人？

横にいる男性は間違いなく、事件について考えている。でも、この時点でそれを発言する勇気がなかった。

Side Out

迷推理

コナンSide

「私は名探偵毛利小五郎です」
事件だと分かるや、おっちゃんは張り切り出した。
たのむから、変な推理はやめろよ。

「えー！ あの有名な。ほらみて、八雲」

「大丈夫。聞こえてるよ。姉さん」

あの2人。

八雲さんが妹だったのか。

逆かと思った。

それにしても、天満さんはずいぶんと子供……いや、落ち着きのない人だな。

「どう、探偵さん。この事件？」

「いや、これからだ。まだ話も聞いてないからな」

灰原は周りに聞こえないように、オレの耳元で聞いてきた。

「ふふふ……分かりましたよ」

関係者全員から話を聞き終わるとおっちゃんは急に笑い始めた。
まさか、おっちゃん。

Side Out

八雲Side

「ふふふ……分かりましたよ」(犯人はあいつに間違いない)
い)

違う。

その人は犯人じゃない。

毛利さんが考えている人物は、犯人とは全く違った人物だった。案の定、間違った推理を披露し、相手に怒られてしまう。

「あれー？おかしいなあ」（間違いないと思ったのに）
どうしよう。

言った方がいいんだよね？

けれど、私に分かるのは“犯人”だけだ。
毛利さんのような推理なんてできない。
もし、“トリックをいってみる”などと言われたら、答えようがない。

「お父さんたら」（新一がいたらなあ）
誰だろう？

！（こんなへボ探偵なら、絶対バレないな）

もう我慢できない。

オーラ

八雲Side

「犯人はあなたですね」

「ばかを言うな。何を証拠に」

（こんな小娘に俺の考えたアリバイトリックが、解けるはずがない）
！

どす黒いオーラ……………。

今まで視えていたものよりも、さらに黒くて冷たい帯が、男から噴出すように溢れ出てくる。

憎悪ってやつなのかな？

どうしよう……………。

とりあえず、動揺してるみたいだけど。

やはり、予想していた通り、トリックがあったようだ。

オーラでそれ以上言うなと言っている。

だけど、怯むわけには行かない。追い詰めないと。

しかたない。誘導させてみよう。

「証拠が分かりませんが、凶器なら」

（……………分かるはずがない。満潮つみを使ったなんて）
うまくいった。

後は自白させるだけ。

「くそ」（バカな。こんな小娘に）

黒ずんだオーラが消えていく。
どうやら、諦めてくれたみたいだ。

(これからだっただのに)

毛利さんごめんなさい。でも、見てられなくて。
だけど、姉さんや子供達は喜んでくれてるみたいだ。

(なんだか、調子が狂う)

あれ？

あのメガネをかけた子は？

もしかして、がっかりしてるのかな？

(工藤君も人の子だったのね)

？

工藤君？

江戸川君じゃなかったの？

でも、横にいる茶髪の子は工藤君って言うてる？

「あの、なんかごめんね」

Side Out

V S

八雲 Side

.....どうしよう。

工藤君？

をお風呂場から廊下に連れ出してきたものの、さらに混乱してるみたいだ。

さきほどから、同じ思考を繰り返し続けている。

それにしても、オレの正体って一体？

「あのね。江戸川君はおかしなこと言っていないよ」

Side Out

コナン Side

まずい。

なぜかは分からないけれど、八雲さんに正体がばれてしまったようだ。

でも、いったいどうして？

このままでは.....。

「あのね。江戸川君はおかしなこと言っていないよ」

「えっ？」

まただ。

まだなにも言っていないのに、こっちの気持ち伝わってるみたいに。

「伝わってるよ.....。わたし超能力者だから」

なっ

.....超能力者？

いま、八雲さんはそう言ったのか？
いくらなんでも、非科学的すぎる。

もしかして、からかわれてるのか？
それとも、聞き間違いか？

「何言ってるの？ 八雲姉ちゃん」

S i d e O u t

V S (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。

おかげさまで、PVも10000超えました。
ありがとうございます。

敵わない人

八雲 Side

「なに言ってるの八雲姉ちゃん」（そんな非科学的なことあるわけ）
「そんな非科学的なことはないって、考えてるでしょ？」

「えっ」（まさか本当に）

「信じられないよね。でも、信じなくてもいいよ。ただ、あなたの正体とか知らないし、言わないから大丈夫よ」

「・・・分かった信じるよ」（ありがとう）

「どういたしまして」

Side Out

コナン Side

はたして、どこまで聞いていいのやら。

“何でも聞いていいよ”と言われたけれど、言いたくないこともあるんじゃないだろうか？

「ありがとう。やさしいんだね」

「どうやら、隠し事は出来ないらしい。」

八雲さんの話を根掘り葉掘り聞くのは失礼なので、こちらから事情を話した。

「そうですか。私と同じ高校生だったですね」

「ああ、うん」

「じゃあ、蘭さんが考えてた、新一さんってあなただったんだ」

「蘭が？」

「うん。あなたのこと思ってたよ
あいつ。」

オレのこと……………。

「良かったら、聞いてあげようか？」

「いやいいよ。余計心配させるだけだし
やせ我慢だ。」

ほんとは知りたい。」

蘭の気持ちを。」

「そう、でも無理しちゃだめですよ
うっ。」

八雲さんがオレを真剣なまなざしで見つめてきてる。
なんというか、八雲さんには勝てないみたいだ。」

「超能力者ですから」

敵わない人（後書き）

お気に入り件数が2件に
うれしすぎて泣きそつです。
ありがとうございます。

最強コンビ

コナンSide

『きゃあああ』

今度は何だ!?

「工藤さん。歩美ちゃんって、さっきの子だよね?」

「まさか、歩美になにかあったのか?」

「あ、待って。工藤さん」

オレは八雲さんの顔を見ることもなく、お風呂場に走った。
八雲さんの声を聞いただけで分かる。

なにか、悪い事が起きたんだ。
くそっ。

無事でいろよ!

『歩美』

!

風呂場を思いつきり開けると、犯人の男が右手にナイフを持って、
歩美を抱えていた。

『歩美!』

「おっと、動くなよ」

まともに動けねえ。

近寄ろうとしたオレに対し、犯人がさらにナイフを押し当てる。
これ以上近づけば、確実に歩美の頬から血が流れ落ちるだろう。

どうする??

スリッパだからキック力増強シューズは履いてないし、
麻酔針を
撃とうにも距離が遠すぎる。

「工藤さん。私の指示に従ってください」
!

そうか。八雲さんなら。

「お願い。八雲さん」
Side Out

八雲Side

「あ、待つて。工藤さん」

工藤さんを追いかけながら、周りを見渡してみると
いつのまにか、所々に小さな黒いオーラが浮かんでいる。

あの人まだあきらめてなかったの？

しまった!

ここからでも分かる。

風呂場につくと、すでに工藤さんが浴場の入り口に立っていた。
その後ろから、浴場を覗いてみると歩美ちゃんが犯人に抱えられて
いた。

能力と能力（前書き）

八雲視点

能力と能力

まさか、ナイフを隠し持ってたなんて。

能力に頼りすぎていたのだろうか？

ナイフの存在に全く気が付かなかった。

(ふふふ、このまま逃げ切ってやる)

ダメそれだけはさせない。

「工藤さん。私の指示に従ってください」

「お願い。八雲さん」(どうすればいい)

「待つててください」

「おら、なにやってんだ。ささつとどけ！ このガキがどうなって
もいいのか？」

犯人はそこに居る全員に、刃物が見えるようにチラつかせながら、
お風呂場の入り口に向かってゆっくりと歩いている。

(そうだ。そのまま道を開ける)

その姿に圧倒されるように、周りの人たちは犯人から遠ざかってい
く。

「……………ごめんなさい。無理みたいです」

だめだ。

あの人は逃げることしか考えてない。

どうすれば。

「なら、誘導させるんだ。大丈夫。八雲さんの能力があれば、誰にも負けないよ」

(落ち着いて)

「ありがとう。工藤さん……」

でも、誘導ってどうやって？

相手は興奮状態にあるから、さっきみたいな誘導はもう効かないだろうし。

「おい、そこなにやってんだ開ける!」

(ちんたらしてるんじゃないよ)

「コナン君」

考えてる間に犯人は、工藤さんのすぐ目の前まで来てしまった。歩美ちゃんの目からは涙がぼろぼろ流れ落ちていく。

(よし、この位置なら)

工藤さん？

なぜか工藤さんは屈み込んでしまう。

「なにやってるんだ! ガキ」(蹴ってどけよう)

「工藤さん! 危ない!」

間一髪

コナン Side

「工藤さん。危ない！」

蹴る気か？！

足の動きに気付いたオレは、八雲さんの叫び声にも似た声で、蹴られることを確信した。けれど、よける必要はない。

悪いな。蹴られるより前に、眠ってもらうぜ！

屈んだ体制から、麻酔針を撃ち込むと犯人は倒れこむように眠ってしまう。

「ふう、大丈夫か？ 歩美？」

「コナン君」

「おわっ！？」

犯人から解放された歩美が抱きついてきた。つて、睨むなよお前らオレの意思じゃねー！。

「灰原………つてお前もかよ」

「八雲姉ちゃん」

灰原に助けを求めようと見てみると、灰原までもがオレを睨んでやがった。

”なんでなのか” 尋ねようと八雲さんをみると、悲しそうな顔で立っていた。

「どうかしたの？ 八雲姉ちゃん」

「うん。すごいなと思って、結局うまく誘導してあげられなかった」

「そんなことはないよ」

八雲さんはちゃんと誘導してくれたよ。
”危ない”ってね。

「……………ありがとう」

「ちよつとまって」

「はい？」

蘭？

なんだか険しい顔でオレに
いや、八雲さんに近づいてきた。

「今、工藤さんって言わなかった？」

たじたじ

八雲 Side

「今、工藤さんって言わなかった？」（正直に答えなさい）

「えっ、えっ」と

目が完全に据わってる。

心を視なくても、何を考えてるのか分かりそうだ。

「実は以前、お会いしたことがあるんですよ。で、コナン君と工藤さんが重なってしまっただけ」

「え？ 私知らないよ、八雲」（どこで会ったの？ いいなあ）

「姉さん」

余計な事言わないで。と言いたくなった。

蘭さんはますます私を睨んでくる。

「うそつかないでもらえますか？」（もしかしたら、手が出ちゃうかも）

怖すぎる。

ある意味犯人よりも怖い。

「ええっと、姉さんが知らない所で会ったんだよ」

もういいですか？

許して。そう言えたらどんなにいいか。

逃げられるものなら、逃げ出したい。

「まあいいわ」（今度、あいつをとっちめる）

助かった。 じゃない今度は工藤さんが危ない。

「あの、そのときですね」

「なに?!」(まさか、ナンパされたとか?!)

「工藤さん。あなたのこと想ってましたよ」

「へっ?」

Side Out

蘭 Side

「へっ?」

思ってたってなに?

なにを思ってたのよ?

聞きたい。

でも、聞くのはなんか負けた気がする。

「そう、ならいいわ」

今度帰ってきたら、じっくり話を聞いてあげるんだからね。
新一。

特に”思って”たった所を。

またいつか

八雲 Side

「ああ、そうだ」

「はい？」

今度は何ですか？

あまりの恐怖に、途中で能力をOFFにしてしまった。そのため、今蘭さんが何を思っているのか分からない。再び能力をONにするのは勇気がいる。

「帰る前にメールアドレス教えてくれる？」

「ええ、もちろん。喜んで」

よかった。

どうやら、仲良く慣れそうだ。

でも、なぜだろう顔があんまり笑ってないような気のせいですよね？

うん。

いい方にとらえないと。

「それじゃあ、行こうか？ 八雲？」

「うん。姉さん。コナン君もまたね」

「うん、またね。八雲姉ちゃん」

Side Out

コナン Side

なんか、オレにも蘭あいつの心が視えそつなような気がする。
さきほどから、感じられる空気はやたら重い。
でも、口出しは出来ない。

口を挟めばよけい大事になる。
いままでの経験上、絶対。

悪い。八雲さん。

また今度あったときに詫びるから。

またいつか（後書き）

第一章完。

第2章にはあと2人増えます。
おたのしみに

会場（前書き）

コナン視点

会場

「うわー。すごい人だね」

「当たり前だろ？ 決勝大会なんだから」

少年探偵団の奴らは試合会場が珍しいのか、あっちこっち見回している。

野球やサッカーで使うスタジアムとはすこし違うからな。

あまり、けるけるするなよ。お前ら。

はぐれたらたいへんだからな。

「蘭お姉さんはこんな大きな大会に出るんですね」

「ところで、優勝したら何もらえるんだ？ うな重か？」

「空手の大会でそんなものもらえるか！」

「たいへんそうね」

「なら、手伝って」

「いやよ。眠いし」

いつなら眠くないんだよ？

灰原はあくびを交えながら、他人事のようにオレの”子守り”を見ている。

「あつ、八雲お姉さんだー」

「おい、走るな」

”危ないぞ”っという前に走り出している歩美。

「おっと」

「あつごめんなさい」

「謝ってすむなら、警察はいらないだよ。お譲ちゃん」

茶髪にサングラス、おまけにピアスまで空けている男とぶつかって

しまつ。

よりもよつて、あんなにかつい男とぶつかるなんて
思わず、舌打ちを打ちたくなつた。

「歩ちゃん」

八雲さん大丈夫。

オレが奴を眠らせるから。

「なんだ？　もしかして、姉ちゃんが相手してくれるのか。あなた
みたいな美人なら、オレも文句はねーよ」

？

八雲さん？

オレの思考に気づいてない？

会場（後書き）

バトルはありません。
書けません（汗）

困った人

コナン Side

「やめたまえ」

「いてててて」

「花井先輩」

オレが助けるよりも前に、いかつい男はメガネをかけた柔道着姿の男性に締め上げられた。

どうやら、八雲さんの知り合いらしい。

「まったく」

「あの、ありがとうございます。先輩」

「いや、かまわないよ。しかし、こんなところで会うとは奇遇だ。運命かもなあ」

「……さりげなく、くどいてやがる。」

なにやってるんだ。あの男。

八雲さんが困惑しているのに、まったく気づかず口説き続けている。さっきの男より、たちが悪いかもしれない。

しかたない。止めよう。

「なにやってるんだー」

「ふおっ」

どきっ。

花井さんはオレが止める前に、柔道着姿の女性に倒されてしまった。

Side Out

八雲 Side

困ったな。

花井先輩は悪い人ではないのだが、自分の話をし続ける傾向がある。いまも一方的に話を進めている。

「なにやってるんだー」

「たくつ、ごめんなー八雲ちゃん」

「周防先輩」

「知り合いなの？ 八雲姉ちゃん？」

「ああ、うん。学校の先輩だよ」

Side Out

困った人（後書き）

というわけで縦笛コンビ登場です。

OFF

八雲視点

「それじゃあ、またな。八雲ちゃん」

「ああ、はい」

周防先輩はのびたままの花井先輩をそのまま、連れて行ってしまった。

「ねえ、八雲姉ちゃん」

「なに？ コナン君」

「具合悪いの？」

「ううん。なんで？」

工藤さんは何か聞きたそうにしてるけれど、何が聞きたいだろう？

Side Out

コナンSide

やっぱり、八雲さんはオレの思考に気づいていない。

おかしい。

「具合でも悪いの？」

「ううん。なんで？」

あれ？

でも、話している感じは普通だ。

いや、普通なんだけれど、八雲さんならオレの言いたことが先に分かるはずだ。

「でも、なんか調子悪いみたいだよ。ほら、ぼくが言いたいこと・・・」

もしかして、能力をOFFにしてるのか？

たしか、八雲さんは能力をON・OFF出来ると言っていたはずだ。

「ああ、いまOFFにしてるから」

そうか。

それはそうだ。常に人の心を覗いていたら、ノイローゼになっちまう。

「ごめん」

「なんで、誤るの？ 誤ることはないよ」

Side Out

OFF (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。

コンビ

蘭Side

あつ、いたいた。彼女だわ。帯に”周防”って書いてある。彼女が次の対戦相手の周防美琴さんね。

やっと、探していた人物が見つかった。狭い控え室でも、これだけの人数がいると探すのも一苦労だ。探していた人物は髪をポニーテールにした、かわいらしい女性だった。

「あのっ」

「ん？ なに」

「次の試合よろしくお願いします」

「ああ、そんなのいって。頭上げな」

「なんだか、男ぽい返しかただわ。」

「ううん、八雲君！」

？

誰かいるのかしら？

よく見ると周防さんのすぐ近くにメガネをかけた男性がいた。

「あつ、やっと起きたか、花井！」

「周防？」

「たくっ、あんま恥ずかしいことするなよ」
もしかして、邪魔しちゃった？

「あの、それじゃあ、私はこれで」

「ん？　なんで？　もっと話そうよ」

「えっ、えっと邪魔しちゃわるいかと」

「はっ？　ちよつとまって、なんか勘違いしてないか？　こいつはただの幼馴染！」

「ああ、そうなんですか？」

　　なんか、やたら赤くなって、焦ってるけれど？

あんまり追求しちゃだめよね。初対面なんだし。

でも、いいなあ。一緒にいられて。

「ところで、八雲君はどこだ？」

「もう、いねーよ」

「なにー！」

『うるせい。騒ぐんじゃないねー』

ぶわっ。

「ごめんなー。騒がしい奴で」

……………前言撤回したほうがいいのかも。

Side Out

切り替え

八雲 Side

「次の選手の入場です」

「おっ、次が蘭の試合だな」

アナウサーの声とともに、花道から蘭さんが出てきた。蘭さんからは試合の相手が誰なのか、聞かされていない。

「うそ」

出てきた相手に言葉を失う。
よりもよって。

「周防先輩……………」

どうしよう。

どっちを応援したらいいんだろう？

「あれって、八雲お姉さんの知り合いなんだっけ？」

「うん」

「だったら、2人とも応援しようぜ」

「そうですね」

そっか。そっだよな。

「……………がんばれ……………」

がっ。

「周防先輩！」

周防先輩は足に蘭さんの足技を喰らい、よろけた。
そして、蘭さんとはどめのかかとおとしを周防先輩に落とす。

「「「あー」「」」

「負けちゃったね。八雲お姉さんの知り合い」

「うん。でも、蘭さんが勝ったから」

そうは言うものの、内心複雑だった。

Side Out

コナン Side

「元気出して。八雲お姉さん」

「落ち込まないでください」

「そうだけ」

蘭が勝ったものの、素直に喜べない。

歩美、光彦、元太もそうだったらしく、慰めている。

「ほら、次の試合が始まるわよ？」

灰原……？

もしかして、話を切り替えるつもりなのか？

八雲さんが周防さんのことを考えないように。

「ああ、次は男子だっけ？」

「ええっ」

「………ありがとう。みんな」

どうやら、オレたちの気持ちは伝わったようだ。

そう言えば次の対戦相手は誰だっけ？

『八雲君。見てくれ!』

「……………花井先輩」

花道から出てきたかと思えば、絶叫をかます花井さんに会場は笑いに包まれた。

はははっ。

S i d e O u t

切り替え（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

バカ

周防 Side

「ありがとね。毛利さん」

「いえ、こちらこそ」

試合が終わった後、控え室に戻る前に毛利さんを呼び止めて、硬い握手を交わした。

驚いた。

同年だとは思えないほど、強い。

もしかしたら、今後こんなに強い女性には会えないかもしれない。そう思ったら、握手を交わさずにはいられなかった。

「ねえ。よかったら、メルアド交換しないかい？」

「ええ、もちろん」

よかった。

急な申し出にも関わらず、毛利さんはにこりと笑って受け入れてくれた。

「じゃあ、早く控え室に戻って……」

『八雲君。見ててくれ！』

「……あのバカ」

せつかく、いい気分だったのに台無しである。

今度は何をしてやがるんだ？

「ごめん。毛利さん。私ちょっと、止めてくるから。さき行って」

「ああ、うん」

挨拶もそこそこに、会場に戻るのであった。

Side Out

コナンSide

「いや〜。手ごわい相手だった。八雲君見ててくれたかい？」

「はい、おめでと〜ございます」

また、やってるよ。

花井さんは試合が終わった後、すぐに来て八雲さんを口説き始めた。八雲さんが困惑してるというのに。

いい加減気づけてのー。

Side Out

バカ（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます

エスパー

コナン Side

「ところで、八雲君はなぜここに？」

「はい。実はこの間の旅行で、仲良くなった方に誘われまして」

「ほう。そうか。なんて方だ？」

相変わらず、八雲さんは花井さんによるアプローチが続いている。なんだよ、そのうれしそうな顔は？ 鼻の下が伸びきってやがる。

「毛利蘭さんです。周防先輩が戦っていた」

「むっ、周防がそれは気づかなかつたな」

周防さんの知り合いなのか？

そういえば、さっきも止めに来てたな。

「あの、もしかして、周防さんの知り合いなんですか？」

「ん？ 知り合いどころか。ぼくの幼馴染だ」

オレが花井さんに疑問を口にする前に、光彦が尋ねる。

「えっ？」

「なぜ、驚く？ メガネの少年？」

「あ、いや」

幼馴染……。

苦労してるだろうな、周防さん。はははっ。

「そうだ。ぼくたち周防さんにこれから会いに行くんです」

「周防に？ なんでまた？」

「周防お姉さん、蘭お姉さんに負けちゃったの」

「そうか、だが止めておいた方がいい。あいつはそつじつの苦手だ
ろつし……」

なんだ？

空気がいきなり変わった。

「周防？」

「あの？ 花井先輩どうかしたんですか？」

「いま、周防に呼ばれた気がした」
はい？

暴走

コナン Side

「……………何も聞こえなかったぜ？」

元太は不思議そうに周りを見渡す。

もちろん、周防さんの姿など見えない。

「間違いない。あいつがぼくを呼んでいる」

「あつ、ちよつと、花井さん!？」

そつといい残すとオレの静止も聞かずに、花井さんは会場の外に向かって、走り去って行った。

「なあ、八雲姉ちゃん。あいつエスパーなのか？」

「たぶん、違うと思う。でも、花井先輩は周防先輩のことになると人が変わるから」

それは本当に八雲さんが好きなんだろうか？

でも、いまはそんなこと考えてる場合じゃない。

「追いかけるぞ」

オレたちは走り去っていった花井さんのあとを追つ。

会場を出て、廊下を出ると誰の姿もない。

「だれも、居ませんね」

「どこに行つたんだらう？ 花井お兄さん」

「八雲姉ちゃん」

お願い。

オレは八雲さんにアイコンタクトを送った。

「うん。分かった」

Side Out

八雲 Side

「うん。分かった」

まかせてください。工藤さん。
能力をONにして、あたりを見回す。

が、周りは人の思考で溢れていた。

オーバーヒート

八雲 Side

「…………どこにいるんだろう？
これじゃあ、よく分からない。」

どこもかしこも文字、文字、文字。

360度どこを見回しても、心という名の文字で溢れている。

浮かんでいる文字の中から、周防さんを視つけるには時間がかかる。

いたっ。

頭がいたい。

考えてみれば、当たり前前の事だ。

この間の宿泊先では、従業員を合わせても500人前後。

しかし、この会場には1万以上の人数がいる。

その1人1人の思考を確認してるのだ。

頭がおかしくならない方がどうかしてる。

『八雲姉ちゃん』

！

「……………工藤さんだよな？」

呼ばれた方を見ると、工藤さんらしき人物は文字で埋め尽くされて
いた。

「早くOFFにして！」

「ああ、うん」

言われたとおり、能力をOFFする。

すると、文字たちは消えて、今度ははつきりと工藤さんの顔を確認できる。

「大丈夫？」

「うん、平気。眩暈がしただけ」

「なら、八雲姉ちゃんはここで休んでて」

「うん。ごめんね」

役に立てなかった。

コナン Side

くそっ、何で気づかなかった。

考えればすぐに分かったことじゃねーか！

八雲さんからは脂汗が浮かんできている。そうとうな負担だったに違いない。

「誤るのはこっちだよ。無理させちゃった」

「いいの、力になりたかったから」

「力？」

「そう、私……」

『周防！』

八雲さんの声を遮るかのように、花井さんの絶叫が響渡った。

眼差し

コナン Side

今のは花井さんの声か？

「早く行ってあげて、江戸川君」

「でも！」

「私なら大丈夫、少し休めば治るから」

そうは言うものの、具合の悪そうな八雲さんをこのまま置いてはいけない。

「大丈夫よ。私が見ててあげるから」

「灰原……頼む」

灰原が見てくれるなら、安心だ。

オレは急いで、声のした方へ走りだす。

すると、後方から少年探偵団の声がし始めるが、構ってられない。

「周防、周防！」

「花井さん！」

「君はメガネの少年」

廊下にあつた非常口から外に出て、少し離れた場所にいた。

花井さんは周防さんを抱えるように抱きしめている。

「周防さんは？」

「気絶しているようだが、大丈夫なようだ。……ぼくがついていたのに」

花井さん……。

これがあの花井さんなんだろうか？

歯を食いしばり、真剣な眼差しで周防さんを抱えている姿は、先ほどまで八雲さんを口説いていた人物と同一人物とは思えない。

「ねえ、なにがあつたの？」

「さあな、分からん。ぼくもここに着いたときには周防は既に気絶していた」

なら、調べるしかねーか。

周りを見渡してみると近くに倉庫らしき、小さな建物が建っていた。

倉庫

コナン Side

なんだ？

あの倉庫は？

倉庫らしき黒い建物が芝生の中にぽつんと建っている。

会場からは100mも離れていない。

道具入れか何かだろうか？

「花井さんはそこにいて」

「待ちたまえ、少年！」

周防さんは花井さんに任せて、倉庫に近づいてみる。

倉庫っていうより、物置だな。

家庭にある物置を大きくしたような建物だった。

なんだかいやな予感はあるが、少し開いている扉からそつと中を覗いてみる。

『なっ』

「どうかしたのか？ 少年？」

「死んでる……」

さつき会場で会った、いかつい男が倉庫の中で倒れていた。

男の頭から血が溢れ、おそらくはもう死に絶えているだろう。

「どうかしたのか！」

「大丈夫。こっちは平気」

「コナンくん」

「コナン」

「コナン君」

”だから、周防さんをお願い”と言おうとしたオレの言葉を遮って、歩美、元太、光彦の順で非常口から現れた。

「…………おまえらな」

「何怒ってるんですか?」

「置いてったお前が悪いんだぜ!」

「そっだよ」

「分かったから、あんまり騒ぐなよ」

コンプレックス

コナン Side

『どうしたの!? コナン君?』

「蘭姉ちゃん! そこから動かないで騒ぎを聞きつけて、蘭までやってきた。」

蘭には非常口から、動かないように言う。

「……うん。わかった」

「お前らも、ここから動くなよ」

少年探偵団の奴らにも釘を刺す。

現場保存権、蘭たちに死体を見せないためだ。

「ねえ、何があつたの?」

「ああ、実は……」

「江戸川君!」

また、言葉を遮られた。

つて……、

「灰原と八雲姉ちゃん!」

八雲さんが灰原を連れて、非常口にやってきた。

非常口には既に蘭がいるので、入り口がきつきた。

「具合、大丈夫なの?」

「うん、もう平気。何か出来ることある?」

「えっ、でも」

さっきまで、具合が悪そうにしてたのに無理をさせたくない。

「大丈夫だから。……………やらせて」

八雲さん？

八雲さんの顔はあのときのように真剣だ。

「分かった。だけど、無理しちゃダメだよ？」

Side Out

八雲Side

「分かった。だけど、無理しちゃダメだよ？」

言われちゃった……………。

あの時と逆になっちゃったもんね。

だけど、工藤さん。

私、役に立ちたいの。

この力は私にとって、コンプレックスでしかなかった。
その力がやっとな、人の役に立つのだ。

「なにをすればいい？ 江戸川君」

Side Out

状況確認

コナン Side

「……………それじゃあ、八雲姉ちゃんは事件関係者が集まるまで、こっちで待機してて」
「分かった」
とりあえず、八雲さんと灰原にはオレたちと同じ所に移動してもらおう。

よし！

状況を整理してみよう。

まず、非常口には蘭がいる。

オレが立っている場所は、非常口から出てすぐの場所。
1 mも離れていない。

周りには芝生が生えていて、小さいが原っぱのようだ。

ここにはオレと八雲さんに灰原。

それから、少年探偵団と花井さんと周防さんがいる。

そして、目線の先には先ほどの物置がある。

会場への入り口はあそこしかないようだ。

いくから見渡してみても、蘭のいる非常口しか入り口は見当たらない。物置のうしろに金網が有るので、他の場所から出入りした可能性はない。

ファンファン。

おっと、警察が来たみたいだな。

事件関係者が集めてもらえば、もっと状況がよく分かるはずだ。

Side Out

「うーん」

「周防、大丈夫か？」

頭の上から声がする。

目を開くと見なれた花井の心配そうな顔が広がる。

「……………花井？　どうかしたのか？」

こいつがこんな顔をするなんて……………。

なにがあっただんだ？

「何も言っな」

「ちよつと、花井？」

すると花井は私を強く抱きしめてきた。

あまりの恥ずかしさに、花井の腕を解きたかった。

「何も言っな」

花井は私をさらに強く抱きしめて言った。

こんなに真剣な顔はひさしぶりに見た気がする。

熱中

コナン Side

「容疑者は全部で5人か」
ほどなく、捜査官たちによって、この場所に容疑者が集められた。
会場にいた1万人以上の中で、被害者と面識があったのはあの5人
だけ。

男性が3人で、女性が2人か。

あの中に犯人がいる。

まずは容疑者の話を聞くか。

Side Out

八雲 Side

「では、あなたから、話を聞きましょうか？」

目暮警部さんが容疑者の1人に話を聞き、その隣で高木刑事さんが
メモを取りはじめている。

え、えっと。

私の出番はいつなんだろう？

もしかして、忘れられてるのかな？

工藤さんは容疑者の話を聞きながら、なにかを考えているようだ。

ごめんなさい、工藤さん。覗きます。

(あの人には動機もあって、アリバイもないのか)

.....工藤さん。

やっぱり、私のこと忘れてる？

工藤さんの思考には私のことなど、片隅にもない。

勝手だけど、容疑者の思考も視てみよう。

(なんなんだよ) (早く終われ!) (何でこんな目に) (今の所は
大丈夫みたい) (はあく、だるい)

!

あの人の思考!

明らかに他の人と異なってる。きっと、犯人だ。

「江戸川君!」

Side Out

熱中（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

終息

コナン Side

「江戸川君！」

やべつ。

八雲さんのことすっかり、忘れてたぜ。

「ごめん、八雲姉ちゃん」

「大丈夫だよ。それよりもこっちに」

「うん」

オレと八雲さんは話を聞かれないように、少年探偵団と花井さんたちから少し離れる。

「それで、犯人は？」

「右から2番目の女性です」

右から2番目。

14、15歳くらいだろうか？

ショートカットで、まだ幼さが残る可愛い感じの女性だ。

……あの人が。

「じゃあ、それを言おう」

「えっ、無理ですよ。あれだけじゃあ」

八雲さんはオレの言葉を聞いて、犯人の女性を見る。

「やっぱり……無理です」

八雲さんの目には何が写ってるんだ？

犯人だと分かっても、確証がないようだ。

「なら、この間みたいに”あなたが犯人です”って言ってみるんだ」
「まだ、話も聞いてないですけど、大丈夫でしょうか？」

たしかに、まだ彼女の話も聞いてない。
目暮警部たちはやっと、2人目の男性に話を聞き始めたところだ。

「まあ、何とかしてみるよ」

「分かりました」

Side Out

八雲 Side

『犯人はあなたですね』

私は大声で犯人の女性を指した。

すると、目暮警部と高木刑事だけでなく、花井先輩たちまで驚いている。

子供たちの方は哀ちゃんを除く、全員が喜んでいる。

「な、なにを言ってるの？ 何を根拠に？」（ばれるはずがない）

「え、えっと」

賭け

八雲 Side

根拠って、言われても……。

ど、どうしましょう？ 工藤さん。

すぎるような気持ちで、工藤さんを視つめてしまつ。

(とりあえず、それらしいことを言ってみよう)

……いえ、工藤さん。それが分からないんですが、それらしいこと。それらしいこと。

そうだ！

「根拠ならあります。根拠は」

お願い。誘導されて。

「どうしたの？ 早く言ってみてよ」(大丈夫。あの場所は見つからない)

やった！

でも、あの場所ってどこ？

「えっと、あなたはある場所に、何かを隠したんです」

「そう、それはどこ？」(絶対分かるわけがない)

だめだ。

これ以上は誘導されて、くれそうもない。

「……工藤さん。これ以上は無理みたいです」
「ありがとう、八雲さん。後はオレが考えてみるから、OFF^{休ん}にしてて」

「はい」

私は工藤さんだけに聞こえる声でささやいた後、能力をOFFにした。

Side Out

コナン Side

あの人、どこかに何かを隠したのなら、それは凶器だ。

会場の中はありえない。

警察がすぐに探すような所に、凶器は置いておかないものだ。

残るは会場の外か、あの倉庫の中だ。

会場の外なら、隠したなんて表現は使わない。

となると、倉庫の中か！

「えっ、おい、コナン君？」

Side Out

倉庫の中（前書き）

コナン視点

倉庫の中

中はさすがに薄暗いな。

物置の中に入ってみると、窓はなく明かりも電球のみで、外から見るときよりも暗く感じる。

中にはボールなど体育で、使う道具が入れられていた。

やっぱり、この物置は体育倉庫ってやつだな。

この中から、凶器を隠せそうな場所は……。

まずはゆっくりと、倉庫の中を見渡してみる。

一通り見渡してみても、特に変わった場所はない。

道具の中に凶器を隠してのか？

サッカーボール、ボレーボール、飛び箱、テニス用ネット、マット……。

今度は体育道具1つ1つをゆっくりと観察していく。

この中で何かを隠せるとしたら、飛び箱しかないけど。

あれは前に使われたトリックだからな。

体育道具で、唯一物を隠せそうな飛び箱を眺めてしまう。

……まさかね。

まさかとは思いつつ、飛び箱を開けてみると中には、銀製製の杖が隠されてあった。

まじかよ!?

ってゆーか、一度使われたトリックでいいのか？

ははははっ

以前、同じ体育倉庫で起きた事件を思い出し、不安になるコナンであった。

倉庫の中（後書き）

この小説は基本ギャグですから（笑）

それにしても、いまいちな落ちだな。

もつと、どかーんとした……（以下略）

証拠

八雲 Side

「もう終わりなの？」

「えっ、えっと……」

工藤さんが倉庫に行ってしまった後も、わたしは犯人の追求を受けていた。

これじゃあ、私が尋問を受けてるみたいだ。

く、工藤さんどうすればいいんでしょう？

能力をONにして、考えてみようかな……。

「まって」

「江戸川君！」

助かった！

今の私の目には工藤さんが正義の味方に見える。

「証拠なら持って来たよ！ ほら」

Side Out

コナン Side

「うそっ、どうして」

犯人の女性はオレが物置から持ってきた杖を見て、目を丸くしていた。

どうしてって、言われても……。

以前にも、”同じトリックが有ったから”って言っているのか？

「え〜と、結構分かりやすかったから」

「そう、やっぱり頭の悪い人間が考えたトリックはダメね。こんな子供にあっさりバレるなんて」

当たり前障りのないことを言ったのに、女性は泣き崩れてしまった。

「ああうん、ごめん」

なんか、すげー。悪いことした気分だな。

いや、誤ることはないんだけれども。

愛

コナン Side

「そうか……君か」

「え、えっと、花井さん？」

見ると花井さんは黒いオーラをまとわりつけていた。

オレ……いつから、エスパーになったんだっけ？
気のせいだよな。

「安心してください、江戸川君。私にも見えていますから」
止めを刺さないでください。

現実逃避しなかったのに、八雲さんのすがすがしいほどはつきりした言葉で、いやでも現実に戻されてしまう。

「君が周防を傷つけたのか？」

「え、えっえ」

花井さんは黒いオーラをまとったまま、犯人に詰め寄っていく。
犯人の女性は完全に怯えて、青ざめている。

「覚悟したまえ」

「ええええええ」

これは止められねーな。死にたくないし。

Side Out

周防 Side

このままでは花井があの子を傷つけてしまう。

止めなければ。

「花井！」

「………周防？」

「それくらいでいいだろう」

「すまない」

らしくない。

いくら腹が立っていたとはいえ、女性に手を出そうとするなんて。犯人は花井に追い詰められたショックからか、白目をむいて気絶してしまった。

「どうしたんだよ。らしくないぞ」

「すまない………だけど、君にもしものことがあるば、これだけじゃ済まさない。世界を敵に回してやる！」

「は?!」

天然

コナン Side

「花井さん……今の本気なの？」

「ああ、本気だとも」

愛の告白って認めてるよこの人。
それとも、気づいてないのか？

「花井！」

「なんだ、周防？ 顔を真っ赤にして？」

花井さんの態度を見て確信した。

本気で、気づいてなかったのかよ……。
恥ずかしい奴。

自分が何を言ってるのか理解していないようだ。
聞いているこつちが恥ずかしい。

Side Out

周防 Side

「もういい！」

こいつはなんだって。

”恥ずかしいから、止めてくれ”と言いたい。
だけど、それを言ったところで、花井は分かってくれないだろう長
い付き合いだから分かる。

「まあいい、帰るぞ」

「えっ、ああ」

花井は何か考えていたようだが、すぐに止めて話を切り替えてきた。私としてもこのニヤニヤした空気から、早く帰りたい。

「ほら」

そう言って、差し出してきたのは自分の背中。

まさか乗れと言うのか？

「どうした、はやく乗りたまえ」

「乗れるか！」

小学生じゃあるまいし、おんぶなんて恥ずかしくてできるわけがない。

こいつは、なんで気づかないんだ？

またね

周防 Side

「つーか、なんで乗らなきゃいけないんだよ!」

「君はまだ、本調子ではないだろう?」

「えっ?」

気づいていたのか?

………たくつ。

KYの癖にそんなことばっか、気が付きやがる。

「ほら、早くしたまえ」

「〜分かったよ」

「いきなり乗つかるな。負担が掛かるだろう!」

「うるせい」

これでも、妥協してるのだ。

これくらい文句を言っても、罰は当たらないはずだ。

「それではぼくたちはこれで」

Side Out

この後、試合は再開された。

しかし、優勝したのは蘭ではなく、全く知らない選手だった。

準優勝だったとはいえ、蘭はうれしそうにトロフィーを受け取っていた。

「やっと、一日が終わるね」

「うん、そうだね……」
試合も終わって、会場から出ると八雲さんは腕を大きく伸ばしている。

オレも今日一日を振り返って思う。

ほんと、カオスな一日だったぜ。

「でも、楽しかった。また会えるといいね」

「ああ、うん。そうだね。また誘うよ」

また、カオスな出来事が起こりそうな気もするけれど、それはそれで面白そうだ。

そのときまで、楽しみにしておこう。

「それじゃあ、またね！」

またね（後書き）

長々とありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8797k/>

おかしな奴ら

2011年6月17日16時48分発行